

實踐研究報告

教育課程研究指定校での取り組みとルーブリック評価の活用について

三谷 有香吏*

はじめに

筆者は、2016～17年度の二年間、教育課程研究指定校事業（国立教育政策研究所）に代表者として携わり、そこでルーブリックの活用を、はじめて知る機会となった。そこでの成果は既に二度報告している¹⁾。本稿ではその実践から二年が経過し、改めてルーブリックの導入を中心に実践事業を振り返り、今後の筆者自身の家庭科授業につなげることを目的としている。

教育課程研究指定校事業での研究主題は以下のとおり幅広い範囲であった。

地域の生活産業に関する消費者ニーズを把握し、必要な商品を企画する取組や、他学科及び大学と連携し、快適な住空間などを計画する取組等を通じて、生徒の主体性を育み、創造的な能力と実践的な態度を育てる指導方法及び評価方法の工夫改善を図る実践研究

その研究の主な内容は、生徒の主体性を基盤とした、創造性・実践性を育てるための指導方法と評価方法についてである。上記の研究目的のもと、生徒に教室内での授業や課外活動の一環として地元地域と連携した取り組みを行った。また、評価方法では生徒の活動を観点別かつ多面的に把握するためにルーブリックを実践した。

しかしながら、この二年間の研究実践では、国立教育政策研究所主催の研究発表と高等学校での授業公開を二度したものの、振り返ると「何を目的として」ルーブリックを実践しているのか、という大切な視点が欠けていた。いうまでもなく、教育評価と指導方法は表裏一体であり、両者は相互に関連している。目的が曖昧であったという事実は、その相互の関連性を当時、筆者が実践において明確にできておらず、それが生徒の指導に影響をしていたことを意味する。本稿では二年間の実践及び、その反省点、そしてルーブリックの活用、生徒や教員に及ぼす影響と、今後の活用方法を検討していく。

1. 教育課程研究指定校事業の概要

2015年12月、北海道名寄産業高等学校において、筆者は教育課程研究指定校事業の指導方法と評価方法について前任者から研究を引き継ぐことになり、その段階で当時の管理職や教育局の担当者により研究主題、そしてその実践においてルーブリックを使用することは決まっていた。筆者自身、研究代表者になったものの、「ルーブリックとは何か」に関する理解が曖昧な状態から、この事業への関わりが始まった。開始当初は、国立教育政策研究所のホームページなどから評価手法について情報を収集し、手探りで実践した。

* 藤女子大学大学院人間生活学研究科（院生）
北海道名寄産業高等学校

1-1 二年間の実践内容の比較と対象科目の到達目標

表1は、二年間の研究の取り組みを整理したものである。2016年度の取り組みをもとに、下線部が2017年の変更点である。対象科目は一年生「生活産業基礎」、二年生「リビングデザイン」である。二年間を通して、これら二教科を通した共通目標は「生徒の主体性を基盤として、実践性・創造性」を高めることであった。

表1 2016・17年度の対象科目とその内容

生活産業基礎	リビングデザイン
<ul style="list-style-type: none"> ・ルーブリックを使用（各分野にて） ・地域を支える視点を持つ 地域の職業人，地域の施設見学，特産物の商品開発→<u>見学場所の変更，ワークシートの工夫</u> ・産業マップ制作→<u>発表まで厳密に</u> ・商品開発（2回）→（3回），<u>ステッカーデザイン考案</u> ・生徒の主体性，創造性，実践性を育む。 ・<u>公開授業</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・ルーブリックを使用（各分野にて） ・地域を支える視点を持つ 地域の公共施設の空間デザイン，高大連携授業，建築士会による講話，施設見学等→<u>名寄市役所との連携（移住計画）</u> ・模造紙を使用し，協動的な取り組み→<u>ワールドカフェによる発表の形式</u> ・自分の理想とする家を計画 ・生徒の主体性，実践性，実践性を育む。 ・模型製作（ポートフォリオ使用）→<u>学科間連携（本校建築システム科）</u> ・公開授業

※下線部は2017年度の変更事項

年間学習指導計画に掲載した「生活産業基礎」の到達目標は以下の通りに設定した。

衣食住や地域産業について知ることを通して、働くことについて自らの視点で考えることができ、職業について調べることを通して、地域で働く視点や将来設計について意欲的に取り組む姿勢を育て、消費者ニーズの把握によって得られる現状や課題点を把握し、ニーズに則したサービスを提供することができ、地域や他機関との連携をとり、地域産業についてより関心を深め、高校生として今できることについて考え行動できるようにする、地域と連携を図る中で、様々な年齢の方とコミュニケーションをとり言語活動の充実を図りながら学習を進める。

この目標では、「職業観の養成」「地域産業への理解・商品開発を通した地域貢献」「高校生としての実践力」を達成しようと考えた。この到達目標に向かうまでの過程として、学校内外の方々と生徒との交流を重視した。生徒が自らまちについて調べたり、消費者ニーズを把握するために市場調査を実施した上で、作品や商品を様々な場面を想定して考案し、実際に使用していただいたり、関係機関の方からご助言をいただきながら学習を進めた。

一方、リビングデザインでは以下の通りに到達目標を設定した。

自らの住生活についてより深く考え、住生活における問題点や課題点を改善していこうとする力を身に付けさせ、インテリアや色彩について知ることを通して、快適な住環境を整

え、自らの生活を過ごしやすいものとする能力を身に付けさせ、地域の特色や住居の歴史を知ることを通して、環境共生やより快適な住空間を設計し、デザインする知識や能力を身に付けさせる。

この目標では、「住生活の課題の把握及び改善」「インテリアや色彩を知り快適な住環境を整備」「地域の特色や住居の歴史を知ることを通して、環境共生や快適な住空間の設計」「デザイン力の習得」を達成しようと考えた。その中で、住宅展示場へ見学に行くなど、学校内外の様々な方々との交流を図り、実際に見学した知識をいかして、将来的に自分が住みたい家について考察し創造性を養った。

次に、二年間の実践科目と内容について紹介する。

1-2 一年目の概要

一年目は、外部講師や地域の方との交流を重点的に行なった。

第一に、生活産業基礎では、外部講師による講話や施設見学を通して、地域の「産業マップ」を作成した。生徒自らが「まち」についてテーマを決めて主体的に調べる時間を設定した。完成後には、市役所ご担当者の方からご助言をいただいた。また、地域のB級グルメである「なよろ煮込みジンギスカン」を使用した新しい商品を開発する授業を展開した。この取り組みによって、生徒は消費者が何を求めているのかの市場調査やどのような商品としていくか、創造性を膨らませて商品コンセプトから価格の設定までグループや個人で考察する時間を設定した。ポスターに各グループで考察した商品の概要をイラストでまとめさせ、自分たちが考案した「なよろ煮込みジンギスカン」を使用した新しい商品を煮込みジンギスカン隊の代表者に評価をいただいた。

第二に、リビングデザインでも、外部講師との連携をはじめ、旭川にある住宅展示場に見学へ行った。そこで実際に見学したものをもとに、「自分が住みたい家」というテーマで、自分の将来の住宅について考察した。模型製作では、一人一軒を担当し、将来的に住みたい住宅というテーマで、家族構成のみこちらで指定し、ある一定の条件のみ与え、制作させた。

以上のように、一年目は地域との連携や、職業観、住宅の課題などそれぞれの課題点を自ら発見し、改善策を生徒一人ひとりが考察して協働的な取り組みを通し他者の意見を聞きながら、実際に形にしていっていった。

そして評価方法として、第三に、生徒の主体性を基盤とした創造性・実践性を育成するための授業を展開し、ペーパーテストのみに依らない生徒の活動を評価するために、ループリックを使用した。しかしながら、一年目は、東京での発表の際、参観者からの助言として、「学習指導要領における目標と本校生徒の到達目標との関連性が曖昧」、「単位ごとの目標設定が曖昧」、「評価基準と到達目標の関連が曖昧」の指摘があった。つまり、目標と評価基準そして授業内容が上手く関連していない状況であった。また、誰が見ても生徒が変容したと認識できるように、生徒の変容がわかる根拠を出せるようにする必要があった。実際に使用したループリックは、後述する。

1-3 二年目の概要

二年目は、一年目の反省をいかし「目標設定の明確化」、「生徒の変容の可視化」を意識した授業アンケートを実施するよう心がけた。

第一に、「目標設定の明確化」であるが、ループリックに準拠した授業目標を授業の最初に黒板に記入または掲示し、ワークシートにも目標を目立つように示した。生徒にとっても目標が何かを明確に認識できるように、ループリックで自己評価をしてもらい、目標に対する到達度を測定した。

第二に、「生徒の変容の可視化」では、アンケートによる数値の変容のみならず、生徒のワークシートへの記入状況や、作品の完成度などループリックによる評価結果からも生徒の変容としてみる事ができた。

第三に、上記の二つの課題を解決するために、ループリックとアンケート調査の目的を整理した。ここでは「ループリック」は生徒の学習の達成度を測るもの、「アンケート」は生徒のループリックの理解度を測るものとして明確な目標を設定した。

次に各科目での具体的な実践について述べる。生活産業基礎では、二年目の到達目標を一年目と大きな変更はしなかった。しかし、「身に付ける」という文言で文末を終わるように精査した。これは、研究の主題の中にもあった「生徒の主体性を基盤とした、実践性・創造性」を身に付けさせることに関連させた。到達目標に近づけるために、生徒に授業内で、何をさせたいのかわかりやすくなるよう工夫した。

まず、「地域貢献や生徒の創造性や実践性」を身に付けさせるために、煮込みジンギスカンがどのようなものか煮込みジンギスカン隊に講義をしてもらった。最初は興味を示していなかった生徒も「地元のためにこんなにも頑張っている人がいることに感動した」「煮込みジンギスカンは前から知っていたがこんなに色んなところで活躍されているとは知らなかった」というコメントがワークシートに記入されていた。「地域貢献や生徒の創造性や実践性」を身に付けさせるために、商品開発において実際に考案した商品を調理し、試作と再度、調理及び煮込みジンギスカン隊に評価してもらった。一年目は個人でのレシピを考察する時間をあまりとらなかったが、二年目は、個人で考察する時間を長く設定した。グループワークであり意見を出し切れない生徒にも、個人でまずは考えてもらい、クラス全体で発表や評価まで実施した。クラスでよりよい作品を選定し、教員の視点も取り入れ実際の商品販売を想定して、商品のステッカーを考案し、実際に販売する商品に使用してもらった。

次にリビングデザインでは、二年目の到達目標は一年目を基本とし、新たに「住居の基礎的、基本的な知識を得ることを通して、将来を見通した住空間を設計する能力を身に付けさせる」を加えた。一年目の反省を踏まえ、学校の実態に合わせて目標の精選を図った。筆者の勤務校は職業高校であり、すぐに親元から離れて生活をする生徒もいることから、高校卒業後のこと、その後のことについても視野に入れ、目標として取り入れることとした。一年目は将来的に住みたい家を ICT 機器を用いて紹介させたが、地域との連携はあまり深く実現することはできなかった。しかし、二年目は、地域貢献や生徒の主体性を基盤として、創造性や実践性の習得を意識し、名寄市役所との連携で移住計画のためのお試し物件のデザインをした。最初に筆者がお試し物件について紹介し、市役所の担当者から実際に使用者の声として課題となっていることを生徒に伝えた。担当者からは、とにかく寒いことを「どうにかプラスにできないか考えている」とのコメントが生徒に示された。生徒のワークシートでは「名寄市でこんな取り組みをしているとは知らなかった」「名寄って寒いけど人来的のですか」というコメントがあった。その後、これまでの学習の様々な知識をもとに、地域に移住を考えている方が滞在しやすく、長期でも住みやすい空間を考えさせ模造紙にまとめ発表ま

で実施した。考案内容は、今年度の模型制作や、次年度の名寄市への移住計画の内容として引き継がれることになる。その後、地域との連携を通して得た住宅に関する知識や技術を応用し、模型製作を実施した。テーマは将来的に住みたい住宅として製作させた。家族構成はこちらで条件を与え設定させたが、まずは、個人で考えさせ、二人で良いところを出し合いながら話し合いにより間取りを決定していった。生徒の実態を見た際に、個人で作業するよりも、グループや複数で実施した方がアイデアをよく出す傾向があったため、複数で制作させた。

反省点として、目標が何か、クラス全体の生徒が理解しやすいように丁寧に説明をする必要があった。一年目よりも、目標と評価基準や指導方法の関連性がなされているか意識しながら授業を展開した。この際、クラス全体の生徒が理解しやすい工夫をする必要がある。また、単元ごとの学習内容が科目の到達目標につながるように、最終的に身に付けてほしい力として生徒が意識できるように示していく必要があった。そのために、単元毎の評価の観点を毎回整理して、次の単元につなげていく時間が必要であった。

リビングデザインの模型制作では、学科間での連携をとり、本校の建築システム科から教諭による技術指導を依頼した。課題を考える時間や、個人の意見を実際の商品やデザインに反映させる取り組みから、生徒の活動をルーブリックにて評価した。二年目は報告書にも記載したが観点別の評価についてバランス良く実施できるように生徒のみならず教員のフィードバックの時間を設定していく必要があった。

2. 教育実践におけるルーブリックの活用

研究主題に基づいて、生徒の主体性を基盤とした、実践性、創造性を養うために生徒の活動を評価するにあたり、ルーブリックを活用した。また、生活産業基礎・リビングデザインを通して、生徒の多面的な力、特に生徒が知識や理解したことを、将来的に自ら思考し判断しながら行動できる力を評価可能であるルーブリックの特性をいかし、生徒の様々な活動とその活動を通して習得する学力を評価した。

「できた、できなかった」ではなく、到達度を複数、示すことで生徒一人ひとりの学習内容の達成度を示すことが可能である。生徒に各分野で達成してほしい目標を評価基準として具体的に示すことで、生徒にその分野で達成してほしい目標を提示できる。

2-1 生活産業基礎でのルーブリック

まずは、生活産業基礎で活用したルーブリックを振り返る。表2は、産業マップの発表会での評価表であり、筆者が最初に制作したルーブリックである。生徒の主体性を基盤として、創造性、実践性を養ってもらいたいということから設定した。教員の個人的な感覚ではこの程度なら説明がわかりやすいと考え設定したが、評価基準が具体性に欠け簡潔すぎる故に、到達度を教員側で詳細にメモした上で、これらの観点・項目に合わせて評価する必要があった。そのため、非常に「手間」がかかった。それぞれの評価の観点を見ていくと、マップは「表現」の観点で「レイアウト」「仕上がり」という項目からとても大雑把な評価基準であった。それぞれの項目の内容を評価基準として記載する必要があった。また、マップ・発表態度・発表内容の三項目をみると、評価の観点の数が異なり、同じ基準で比較して行けなかった。

表2 「産業マップ2016 年度評価表」

マップ	発表態度	発表内容
レイアウトが良いか	大きな声でハキハキ発表しているか	説明がわかりやすい
仕上がりが良いか		感想がわかりやすい

それ以降、評価項目の中のどのような点を評価していくのか明確にするという課題が明らかとなった。また、教員が詳細にメモをとらずに到達度が把握できるよう評価基準を詳細に記載することにした（表3）。

2-2 リビングデザインでのループリック

表3のループリックは、リビングデザインの一年目の公開研究会にて使用したループリックである。住宅展示場へ行き、生徒自らが理想とする住宅についてプレゼンテーション資料を用いてグループで発表をする授業を展開した。産業マップ（表2）の反省から、一年目ではあるが評価基準を具体的に記載することを念頭に作成した。

表3 「住宅展示場プレゼンテーション2016 年度評価表」

	S(期待する以上に達成できている)	A(達成できている)	B(概ね達成できている)	C(達成できていない)
発表に関して	自分達の発表内容を整理し、要点を強調して聞き手が聞きやすいように原稿を見ずに伝え、聞き手の反応を見ながらより伝わりやすい工夫をして発表することができる。	自分達の発表内容を概ね整理し、要点を強調しながら原稿を時々見ながらも聞き手が聞きやすいように発表する努力をして発表することができる。	自分達の発表内容を概ね整理し、要点を概ね伝え、原稿から視線をほとんど外すことができないが自分達の班の内容を伝える努力をし発表を終えることができる。	自分達の発表内容を概ね整理し、要点に少しまとまりがないが原稿をみつづも発表を終えることができる。
記録に関して	各班の発表に対してキーワードを適切に記入し、各特徴を掘み具体的な内容を記入して振り返りや改善策等、今後の授業への取り組みについて具体的に記入することができる。	各班の発表に対してキーワードを記入し、各特徴を概ね掘みなが記入することができ自分の班に対する振り返りや改善策等を記入して今後の授業への取り組みについて記入することができる。	各班の発表に対してキーワードを概ね記入することができ、各班の特徴をメモ程度で記入し、自分の班に対する振り返りと今後の取り組みについて記入する努力を概ねしている。	班の発表に対してキーワードを記入することはできないが、各特徴をメモ程度で記入し、自分の班に対する振り返りを記入することはできるが今後へ向けての取り組みについては記入することができない。

段階は、S・A・B・Cの4段階とした。前回よりも、評価基準を項目毎に詳細に記載した。これらを事前に生徒に伝えることにより、到達目標を生徒に示すことができた。また、評価基準を記載することによって、取り組みが終了してからも、生徒や教員がこれまでの過程を振り返った時に到達度を把握しやすい。しかし、評価基準それぞれの到達度がどこまでか評価基準の内容を理解して生徒全体が取り組んでいるとは言えず、「内容はあまりわからないけど、ここら辺」という認識で自己評価をしている様子がコメント欄や生徒の声から見られた。

2-3 ルーブリック評価への生徒の反応

表3については評価基準の内容が多く、生徒にとっては理解までに時間がかかっていた。授業時間内に何を目標とし、到達度目標で何を目的として教員が設定しているのか、とても複雑だったと生徒の声があがっていた。実際に授業を受けた生徒達にルーブリックについてのアンケートには次のような記載があった(表4)。

表4 「アンケート結果」

○ルーブリックを使用することについてあなたはどのように考えますか。 二年生リビングデザイン履修者25名回答。(生徒の記述式の内容について一部抜粋) 「先生がどこを評価しているかわかりやすい」 「どれくらい取り組めばこのランク、というのがわかりやすい」 「どうやったら高得点になるかわかりやすい」「先に知れるからやりやすい」 「よんでもよくわからない」「書く内容が少し多い」「難しい」 「評価の内容はまあまあわかるけど、やる内容の説明が不足していたらどうしようもない」

記載の通り、どこを評価されるのかが明確であると、具体的な目標ができ生徒の意欲につながっている。しかし、教員の評価基準の難しさ、また説明の不足から困難を感じている生徒もいた。

また、先述の「産業マップ」の作成の際も、自己評価のコメント欄や生徒の声からも「評価基準はあまりわかってはいないけど、Sだったら、いいんでしょ？」という単純にSが良いとの認識で評価をしている様子もあり、評価基準と自らが習得した学力の関連性を理解した上での自己評価ではなかった。評価基準の内容まで理解して到達目標に向かって取り組んでほしいという授業者の思いとは少し離れていた。これは、評価基準が曖昧であることが課題である。例えば、発表内容であれば、「わかりやすく」という記載があり、何を基準として「わかりやすい」のかが明確になっていなかった。

以上のことから生徒が評価基準を理解しやすいように、評価基準の内容を整理した。目標が何であって、到達度がどこか、二年目には情報量を整理し目標がわかりやすいようにした。

2-4 生徒の反応を踏まえたルーブリックの改善

授業の単元は異なるが、生活産業基礎における二年目の公開研究会にて実践したルーブリックは表5の通りである。生活産業基礎の商品開発分野にて名寄市のB級グルメ「煮込みジンギスカン」を使用した新しい商品を生徒に考察させた。

公開研究会では、ロールプレイングにて自分たちの考えた商品を場面設定して紹介した。

校内で生徒や教員を対象に市場調査し「手軽に食べられる、食べやすくしてほしい」という消費者ニーズが明らかとなった。表5に記載したループリックは、公開研究会において、生徒が自分達で考えたなよろ煮込みジンギスカンを使用した新しい商品を販売の設定に合わせ、実演で紹介している場面に使用したものである。発表態度、発表内容、商品についてそれぞれ評価した。

表5のループリックでは、表3で課題となった曖昧な点を解消するために、ただ「わかりやすく」ではなく、「聴衆の方に顔を向ける」という文言を加え、生徒の発表態度と評価基準の関連性が具体的にわかるように評価基準を工夫した。また、評価段階を4段階から5段階に細分化した。生徒の実態に合わせて、細かい段階にした方が生徒の到達度や達成状況を把握しやすいと考えたためである。

評価基準の内容変更によって、教員の評価や生徒の自己評価は、前回よりも、「何をしたらよいかかわかりやすくなった」という声があった。また、段階が細かくなり、大勢の生徒がいてもどの生徒がどの段階にいるかが把握しやすくなった。ただし、実際には、下記に詳しく載せてあるが、D評価となる者はほぼいなかった。確かに、細分化した方がその生徒に合ったフォローをしやすいのかもしれないが、評価していく中で、あまりに項目が多いと、評価基準に「差」を設ける難しさや教員の負担を考えると、あまり得策ではない。実際の評価結果は表6である。

表5 「なよろ煮込みジンギスカン2017年度評価表」

	S(期待以上に達成できた)	A(達成できた)	B(概ね達成できた)	C(努力を要する)	D(全く達成できていない)
発表態度	原稿を見ることなく聴衆の方を見て、自分達の発表項目に加え抑揚を付けて発表している。	原稿を時々見ることはあるが、聴衆の方に顔を向け、自分達の発表項目を伝えることができる。	原稿から目を離すことはできないが、自分達の発表項目を伝えることができる。	原稿を読みながらつまづくこともあるが、自分達の発表項目は伝えることができる。	原稿をまともに読むことができず、自分達の発表項目も紹介することができない。
発表内容	自分達の商品の特徴、工夫した点等、要点をわかりやすくまとめて紹介し、補足説明までしている。	自分達の商品の特徴、工夫した点等、要点をまとめて説明をしている。	自分達の商品の特徴工夫した点を説明している。	自分達の商品の特徴を簡単に説明している。	自分達の商品の特徴を説明できていない。
商品	消費者ニーズを把握し、高校生の視点で工夫を凝らした商品を開発している。	消費者ニーズを把握し、高校生の視点で商品を開発している。	消費者ニーズを概ね把握し高校生の視点で、商品を開発しようとしている。	消費者ニーズをあまり把握できず、高校生の視点で商品を開発することができない。	消費者ニーズを把握できず商品を開発することができない。

表6 「なよろ煮込みジンギスカン評価結果」

○クラス全体で24名在籍。(女子24名) 一班4人とし、クラス全体で6班構成とした。

- ・発表態度：S→0班, A→4班, B→2班, C→0班, D→0班
- ・発表内容：S→1班, A→4班, B→1班, C→0班, D→0班
- ・商品：S→1班, →A→4班, B→1班, C→0班, D→0班

班での発表として結果を紹介したが、個人での評価では、C 評価がついた生徒もいる。個人での評価結果もほぼ、紹介した内容と同様である。班での評価が高いと、必ずその班全員が高評価となるかと言えば、そうでもなかった。班での評価は、それぞれの役割を見て、個人での評価と、班全体での取り組み状況を見て評価した。ただ、4人で一班の構成とした中で、評価の高い生徒が多いと大体は班全体の評価も高くなる傾向があった。今後、グループでの取り組みの際に個人の評価と全体の評価の関連性をもっと考えていきたい。

また、C 評価、D 評価になる生徒はほばいない状況から、評価の段階については評価基準を検討する必要があった。教員による評価結果は、A または B という評価結果であり、生徒の評価結果と教員の評価結果に差が生じている現状から、生徒が評価基準を理解して評価しているのか、生徒への声掛け等を実施しながら、生徒の理解度や技能の能力の実態に合わせて、評価基準を検討していく必要があった。曖昧さという点では、一時的に解消できたかと考えられた。しかし、文言によってはまだ曖昧な表現が多く残っていた。

実際に公開研究会後の合評会にて、調査官からは「高校生の視点で」という文言は、解釈が様々ということから、評価基準は曖昧であったとの指摘を受けた。どの人でも同じ解釈ができる訳ではない。曖昧な表現は、評価基準を理解した上で確実な評価につながらないという助言であった。また、今回は50分間の授業で三つの項目を評価したが、評価する項目が多く、一つの項目にじっくり評価できないという声もあったことから他の時間に評価項目を分散していくことも今後検討していく必要がある。

公開授業におけるもう一方の科目リビングデザインでは、名寄市に移住するという設定で実際に移住を考えている方向けの物件をモデルに生徒達へ課題を提示した。グループで課題を解決し模造紙へ自分たちの考察した内容をまとめた。その作品を使用し、ワールドカフェ方式で発表と評価をする授業を展開した(表7)。

担当調査官からは、ループリックの評価基準の内容をさらに精査する必要があると助言があった。例えば「地域の居住性に合わせた住空間のデザイン」という文言から、生徒は課題解決型の思考ができるように授業を展開していく必要があるとのご助言だった。つまり、学習指導と評価基準の整合性がとれていないという指摘であった。そもそも、学習指導内容の目標と、その学校の生徒に合わせて作成する到達度を整理できていなかった。また、目標に合わせた授業内容を展開できずにいた。合わせて、評価基準も目標と関連付けられず、生徒が目指した取り組みと教員が評価している内容が合致していなかった。その内容として、名寄市が寒い現状に対してどのように対処していくか、という課題に対する生徒による解決策の回答のほとんどが「床暖房、ストーブをつける」という回答であった。生徒の相互評価においては、評価結果を単純に「できた」「できなかった」という記載が多かったことから、指導方法の工夫に合わせて、生徒の思考判断表現の育成の工夫をすることが必要であると助言

があった。

このことから、学習指導内容の目標と指導内容や目標が合致しているのか検討していく必要がある。生徒の実態に合ったどの評価者がみてもぶれがない評価基準を作る必要がある。生徒へループリックを活用する意味をわかりやすく伝え、ループリックを継続して実施できるように、評価基準の内容の整理、フィードバックを素早く、その結果から課題点を把握する必要がある。

授業の目標と評価基準が合っていないことがことから、生徒の学習内容と教員の評価する基準が異なっていたため、生徒の動きと教員の動きが噛み合っていなかった。このことから、生徒に達成してほしい目標に基づく指導ができておらず、生徒を評価する際にずれが生じていた。このことを踏まえ、目標が何かを明確にした上で、指導内容と評価基準の関連性を整理して授業を展開していく必要がある。

表7 リビングデザイン「名寄市へちょっと移住計画2017年度評価表」

	S(期待以上に達成できた)	A(達成できた)	B(概ね達成できた)	C(努力を要する)	D(全く達成できていない)
発表態度	原稿を見ることなく聞き手に伝わりやすいように、抑揚を付け、地域の居住性に合わせた住空間のデザインについて説明している。	原稿に時々目を向けることはあるが聞き手に伝わりやすいように、地域の居住性に合わせた住空間のデザインについて説明している。	原稿から目を離すことができないが、居住性に合わせた住空間のデザインについて説明している。	原稿から目を離すことができず、地域の居住性に合わせた住空間のデザインについて説明が不十分である。	原稿から目を離すことができず、地域の居住性に合わせた住空間のデザインについて説明できていない。
発表内容	発表項目を全て網羅し、居住性に合わせた住空間のデザインを補足説明も加えて説明し、工夫点を聞き手にわかりやすく表現することができる。	発表項目を全て網羅し、居住性に合わせた住空間のデザインを聞き手にわかりやすく説明している。	発表項目を概ね網羅し、聞き手に伝わるように説明している。	説明項目が不十分である。	発表項目を説明することができない。
模造紙の内容	規定の範囲内に情報を収集することができ、課題をわかりやすく提示し表現の方法に工夫が施されている。	規定の範囲内に情報を収集することができ、課題をわかりやすく提示することができる。	規定の範囲内に情報を収集することができ、課題を提示することができる。	規定の範囲内に概ね情報を収集することができ、課題を提示することができない。	規定の範囲内に情報を収集することができず、課題を提示できない。

3. 実践の成果と課題

3-1 一年目の研究で明らかになったこと

一年目は、結果として学校と地域が連携した取り組みにより、生徒がまちの特徴や良さを知ることができた。そして、そのための活動が知識理解のみを追求するのではなく、生徒が活動する場面を設定したことでペーパーテストのみによらない評価を実現できることにつながった。生徒が活動する場面を設定し、様々な観点で評価することにより指導の幅が広がった。目標達成のために、調べる時間や発表時間、考察時間を設定することによって生徒の主体性・創造性・実践性を養うための授業として展開できた。その際には、ルーブリック表2・表3を使用することで、次のような二つの「難しさ」が明らかになった。

第一に、評価基準の設定の難しさである。基準設定には、生徒が本当に理解できるか、到達度の難易度を理解しやすいものにする必要がある。また、あまりにも簡潔すぎると、到達度の区別ができないため、「ここまで」という評価基準をわかりやすく、段階的に表記する必要がある。また、教員から生徒へのルーブリックの説明も丁寧に実施する必要がある。

第二に、評価基準と学習指導の関連性の難しさである。ルーブリックを使用することにより、教員が生徒の達成状況を把握しやすくなる。そのため、次の授業でどの程度復習をするか、あまり達成できていない生徒がいる場合は何がそのような原因となったのか考える機会となった。そのため、生徒の評価のためだけではなく、教員の指導方法や評価方法の振り返りの時間となる。どの観点もバランスよく評価していく必要があるにもかかわらず、偏った観点で評価している現状があった。評価の観点を網羅してルーブリックを使用しているとは言えず、限定された観点でしか評価できていなかった。評価の観点を単元の特性を把握した上で、偏りなく実施していく必要があった。

3-2 二年目の研究で明らかになったこと

一年目に引き続き、学校と地域が連携した取り組みを実施し、その内容を見直すことにより、生徒たちは一年目以上に、まちの特徴や良さを知ることができた。評価方法では、ルーブリックの評価基準を目標に合わせ、段階別に作成したが、目標と評価基準の関連性がとれておらず、生徒にとっても教員にとっても取り組みにくさがあった。到達目標と指導方法の内容にもズレが生じていた。また、目標の内容が、単純に「できた／できなかった」ではなく授業内で得た知識を基に、課題を解決できる指導内容と評価基準を考えていく必要があるとわかった。そのような中で、以下の三点が二年目には明らかになった。

第一に、ルーブリックで示す指標の妥当性・信頼性の明確化である。ルーブリックの精選だけではなく、大部分の生徒が理解し、取り組みやすいルーブリックになっているか検証する必要があった（表3）。また、担当授業はティームティーチングの形態をとるものが多く、複数の教員が公平に評価することができるルーブリックを作成することが必要であるとわかった（表4）。評価基準の曖昧さをなくしていけるように、評価をつけた後、すぐに生徒に返却し振り返りの時間を設定する。その時間で達成できた点と課題点を把握する必要があった。

第二に、評価基準は、生徒ができたかどうかで終わるのではなく、課題を考え解決していける目標とすることが必要であった（表5）。そのためには、評価基準の内容を学習指導要領の内容や学校の実態に合わせて到達目標を考える必要があった。前時までの指導内容の知識や取り組みを関連させ、課題を解決していける授業内容を展開していくことが必要であった。

知識理解を応用させ、ルーブリックの多面的に評価できる特性を活用し、指導内容と評価基準の関連性を持たせる必要があった。

3-3 課題

以上のように、二年間の実践では以下の三点の課題が明らかとなった。

第一に、ルーブリックを通して、生徒の達成度と改善点を明確に把握する点である。二年間を通して、継続してルーブリックを活用することはできた。しかし、生徒はルーブリックについて理解した上で、評価基準の内容を理解していたかは曖昧であった。加えて、評価結果をすぐに返却できる時もあれば、教員の手元で止まった状態で成績に反映していた場面がいくつかあった。この状態では、生徒は達成できた箇所と改善点を把握することが難しい。

第二に、ルーブリックの評価基準の明確化・具体化が必要という点である。曖昧な評価基準を避け、生徒が理解しやすいルーブリックを作成することが今後にも必要になる。生徒間の相互評価では、評価基準を理解した上で、なぜ、その評価結果となったのか、一人ずつ丁寧なフィードバックの時間を設定する必要があった。また、C がついた生徒への手立てはしていたが、それが単に評価を上げるだけでなく、生徒の能力が向上するためのわかりやすい助言や、次回再チャレンジをする場面を設定する必要があった。

第三に、観点別ルーブリックの作成と評価シートの工夫改善、教員の説明を工夫する点である。単元の特性や観点別に柔軟に合わせたルーブリックを実施していくことも必要である。評価シートの工夫改善を図ることも課題の一つである。授業をして評価をしていくが、教員から一つひとつを丁寧に生徒に伝えていく必要がある。

4. まとめと今後の改善点

これまでを振り返り、教科、科目の目標と到達目標を区別し、生徒の実態に合ったルーブリックを作成していくことが必要である。これまでの取り組みで、改善する点と継続する点を整理し、実践と改善を図る。特に、評価のためだけではない視点も考慮して、ルーブリックを実践し、筆者自身の授業改善にも役立てたい。それを踏まえた上で、以下の三点を今後の改善点としたい。

第一に、教育評価と学習指導の一体化をより進めていきたい。実施毎にフィードバックの時間を必ず設定し、生徒の評価結果のみを見るのではなく、教員の指導方法や評価基準の改善をする。指導目標と評価基準の関連性を整理する。学習指導要領をもう一度確認し、本校の到達目標の内容と合っているか単元毎に確認し、修正する。また、その際には、生徒の実態に合った評価基準を作成する。

第二に、評価の効率性の改善に取り組みたい。評価する際には、評価しやすく、その後の結果を把握しやすくできるように、評価シートの工夫改善を図る。また、観点別のルーブリックの作成を図るために、観点別の評価項目の整理を徹底し、単元を終える毎に観点別の評価結果を整理する。

第三に、ルーブリック評価を軸とした PDCA サイクルを授業実践で徹底していきたい。評価をする際には、評価する側面のみならず、生徒や教員自身の振り返りの時間として活用し、指導方法や評価方法の活用につなげる。授業では、毎時間、説明と取り組みの時間を明確にして、教員から生徒への説明を丁寧に実施し、工夫改善を図る。

注

- 1) 国立教育政策研究所 教育課程研究センター『国立教育政策研究所 教育課程研究指定校事業研究協議会資料』文部科学省，2017 年，86 頁
国立教育政策研究所 教育課程研究センター『国立教育政策研究所 教育課程研究指定校事業研究協議会資料』文部科学省，2018 年，86 頁